

# コトシロヌシノ神考

岩 田 芳 子

## 一 『古事記』国譲り神話におけるコトシロヌシノ神

記紀にあらわれる神の名は、記紀におけるその神の役割や性質を表わすものとしてある。それは文脈に位置づけられるとき、ひとつの表現として把握される要素をもつと考えられる。小稿では、『古事記』国譲り神話に登場するコトシロヌシノ神をめぐり、その名の分析を通して、この神がどのような存在として把握され、『古事記』に表わされているのか、考えたい。

コトシロヌシノ神は、『古事記』で大国主神と神屋楯比売との子とされ、国譲り神話に登場する。

是以、此二神（建御雷神と天鳥船神）、降<sub>レ</sub>到出雲国伊耶佐之小浜<sub>一</sub>而（伊耶佐三字以<sub>レ</sub>意）、拔<sub>二</sub>十掬劍<sub>一</sub>、逆刺<sub>二</sub>立于浪穗<sub>一</sub>、跌<sub>二</sub>坐其劍前<sub>一</sub>、問<sub>二</sub>其大国主神<sub>一</sub>言、「天照大御神・高木神之命以、問使<sub>レ</sub>之。汝之字志波祁流（此五字以<sub>レ</sub>意）葦原中国者、我御子之所<sub>レ</sub>知国言依賜。故、汝心、奈何」。爾、答白之、「僕者、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>白我子八重言代主神、是可<sub>レ</sub>白。然、為<sub>二</sub>鳥遊・取魚<sub>一</sub>而、往<sub>二</sub>御大之前<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>還来」。故爾、遣<sub>二</sub>天鳥船神<sub>一</sub>、徵<sub>二</sub>来八重事代主神<sub>一</sub>

而、問賜之時、語<sub>二</sub>其父大神<sub>一</sub>言、「恐<sub>レ</sub>之。此国者、立<sub>二</sub>奉天神之御子<sub>一</sub>」、即踏<sub>二</sub>傾其船<sub>一</sub>而、天逆手矣於<sub>二</sub>青柴垣<sub>一</sub>打成而隠也（訓<sub>二</sub>柴云<sub>一</sub>布斯）。

葦原中国を言向けるために出雲国に降った天つ神に、大国主神が国を譲るか否か、その「心」を問われたときの場面である。大国主神は、自分はそれを言うことができないとし、御大の崎で鳥遊・取魚を行っていた子の八重事（言）代主神を呼び戻す。八重事（言）代主神は、国を天つ神の御子に奉獻する、という大国主神の「心」を答え、そのまま船を傾けて青柴垣の内に隠れる、という内容である。類似の伝承は、神代紀第九段正文・同一書第一にも見られる。

『古事記』は、コトシロヌシノ神のことを大国主神の系譜と国譲りの二場面のみに記す。一方、『日本書紀』は、次の各場面に記している。

- (1) 三鳥溝織姫（玉櫛姫）との婚姻譚と子孫に関わる伝承（第八段一書第六・神武・綏靖・安寧・懿徳）
- (2) 国譲り神話（第九段正文・一書第一・一書第二）
- (3) 神功皇后新羅遠征譚での託宣（摂政前紀（仲哀九年）三月・摂政元年二月）

(4) 壬申の乱での大海人皇子側への託宣（天武元年七月）

(1)は、事代主神が八尋熊罴に化して三島溝織姫（玉櫛姫）に通い、神武妃姫蹈躰五十鈴姫命が生まれるという婚姻譚である。事代主神の子孫は、神武以下、綏靖・安寧の后となり、三代の天皇の母とされており、天皇家の系譜に深く関わっている。(3)(4)では、皇軍を守護するため、託宣に現われる神の「柱」とされる。神功皇后は新羅遠征に赴く際、天照大神をはじめとする複数の神から託宣をうけるが、その一柱が「於天事代於虚事代玉籤入彦厳之事代神」と名乗るコトシロヌシノ神であつた。さらに天武紀元年七月壬申の乱時の記事では、身狭社の生霊神とともに高市県主許梅に憑いて託宣を下したとされる。このように、『日本書紀』でコトシロヌシノ神は、大己貴神の子というだけでなく、天皇の経脈に入り込み、またその子孫の守護に関わる神として記されている。

記紀におけるコトシロヌシノ神の在り方については、記紀成立時のこの神の祭祀状況が反映されていることが指摘される。祈年祭祝詞に、皇居内に祭られる八祭神の一柱として「辞代主」とあり、また「出雲国造神賀詞」に「事代主命の御霊を宇<sup>う</sup>祭<sup>まつ</sup>提<sup>ま</sup>に坐<sup>ま</sup>せ」(宇奈提は奈良県高市郡の雲梯神社)とあつて、コトシロヌシノ神が天皇家及び畿内で重んじられていたことがわかる。その信仰の成立は、天武朝に求められるとされる。<sup>(2)</sup>

記紀に表わされるコトシロヌシノ神は、そうした歴史的な背景を負いつつ、それぞれの文脈に在ると考えられる。コトシロヌシノ神の名とこの神が活躍する記事の相違は、記紀間でコトシロヌシノ神という存在に対する理解の相違することを予想させる。そのことを踏まえつつ、小稿では、コトシロヌシノ神がどのように表わされて

いるか、考えたい。

## 二 コトシロヌシノ神の役割

コトシロヌシノ神は、その名から「事」や「言」に関わる神であると考えられる。『古事記』国譲り神話では、大国主神の「心」がコトシロヌシノ神の発言によって表わされ、その内容が決定力を有している。

高天原の神々が国譲りの交渉に派遣する神を選ぶための協議を行ったとき、天照大神は、「此輩原中国者、我御子之所<sup>こゝ</sup>知国、言依所<sup>こゝ</sup>賜之国也。故、以下<sup>こゝ</sup>為<sup>こゝ</sup>於<sup>こゝ</sup>此国<sup>こゝ</sup>道速振荒振国神等之多在<sup>こゝ</sup>上、是使<sup>こゝ</sup>何神<sup>こゝ</sup>而将<sup>こゝ</sup>言<sup>こゝ</sup>趣<sup>こゝ</sup>」と述べたとされる。ここには、派遣の目的が国<sup>こゝ</sup>神の「言<sup>こゝ</sup>趣<sup>こゝ</sup>」であることが示されている。コトシロヌシノ神の発言が国譲りを承諾する表明となることは、その目的と対応すると考えられる。<sup>(3)</sup>同様の展開は、『日本書紀』にも見られる。

コトシロヌシノ神が、そうした発言を担い、神功摂政前紀三月一日条・天武紀元年七月四日条で皇軍を守護する神の一柱として託宣に現れることから、松村武雄氏は、この神が「一種の神覲的存在態」であるとされた。即ち、

事代主神が所謂モノシリ（物知）の範疇に属する人物——神に關する該博な知識と予言的・託宣的な詞とによつて、司靈者の役をつとめ、呪術・宗教が社会的・政治的な生活面にも強大な勢力を占めてゐた文化期に大きくものを言つてゐた存在態の神話的表现であることには、疑ひがないやうである。（事代主神の司靈性）『日本神話の研究』第三卷、第十四章第五節、培風館、昭和三十年<sup>(4)</sup>

とされる。コトシロヌシノ神が託宣の神であるという理解は、以後も継承される。たとえば、西宮一民氏は、「名義は『神の言葉を受け、その神の代りに託宣すること』を掌る主役<sup>5)</sup>。『代』は本物に代つて、本物と同じはたらきをすること」とされ、また、新編日本古典文学全集『古事記』では、『代』は『…のためのもの』の意。神の言葉が伝えられるための神、すなわち託宣の神の依り代となる神<sup>6)</sup>とあつて、コトシロヌシノ神は、託宣に関わる神として解される傾向にある。顕宗紀に阿閉臣事代<sup>7)</sup>という人物が、人に懸かつた月神・日神から託宣を聞き、天皇に奏上するという記事の見られることも、コトシロヌシノ神を託宣の神と解する根拠として挙げられる。託宣は、神がことばによつてその意志を人に知らしめる方法である。

故、出雲臣等畏<sup>二</sup>是事<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>祭<sup>二</sup>大神<sup>一</sup>而有<sup>レ</sup>間。時丹波水上人名氷香戸辺、啓<sup>二</sup>于皇太子活目尊<sup>一</sup>曰、「己子有<sup>二</sup>小兒<sup>一</sup>、而自然言之、玉婁鎮石。出雲人祭…(中略)…底宝御宝主也」是非<sup>レ</sup>似<sup>二</sup>小兒之言<sup>一</sup>。若有<sup>二</sup>託言<sup>一</sup>乎」。於是皇太子奏<sup>二</sup>于天皇<sup>一</sup>、則勅<sup>二</sup>之使<sup>レ</sup>祭<sup>一</sup>。

(崇神六十年七月十四日)

出雲の大神が祭祀を求めて少女に依り憑き、少女の口を介してことばを伝えている。神が人に憑く託宣は、この例のように、突然のことともあれば、人が神の意志を知るために託宣を求めて場を設ける場合もある。

其后息長帶日売命者、当時、帰<sup>レ</sup>神。故、天皇、坐<sup>二</sup>筑紫之訶志比宮<sup>一</sup>、将<sup>レ</sup>擊<sup>二</sup>熊曾國<sup>一</sup>之時、天皇、控<sup>二</sup>御琴<sup>一</sup>而、建内宿禰大臣、居<sup>二</sup>於沙庭<sup>一</sup>、請<sup>二</sup>神之命<sup>一</sup>。於是、太后帰神、言教覺詔者、…

(仲哀記)

天皇が琴を弾いて、建内宿禰が沙庭で神の命を請う者となり、神功皇后が神の憑り坐しとなって、神の教えを受けている。琴を弾く行為は、神を依せるためと解されるが、天皇はこの時、神に託宣を問う者でもあるはずである。建内宿禰は、天皇と神とを仲介し、皇后に懸かつた神のことばを解する役割を担っていると考えられる。「さには」には、神のことばを解く者(審神者)の意と神のことばを聞くための聖なる「には」の意とがあるが、ここは後者の意である。この場面では、神託を請う者、神が懸かりそのことばを発する者、神のことばを仲介する者が配置されている。

神はことばを介してその意志を人に知らしめる。コトシロヌシノ神が、ことばをもつて大國主神の「心」を表明することは、託宣において神を身に依せる者や、そうした者のことばを聞き解釈する者の姿を髣髴とさせる。

ただし、より厳密に見れば、託宣で神のことばを仲介する者は神の意志をそのものとして知り得る者ではない。神の意志は、当然ながらその神自身に帰属する。そのような託宣の性質と、神代記の国譲り神話でコトシロヌシノ神が、神の「心」を、それ自体として「言」に表明することとは、同一と解されるのであろうか。また、託宣の場合には、神と、神に問う者との関係が見られるが、国譲り神話に神に問う者は存在しない。

岡久生氏は、コトシロヌシノ神は、「神と一般の人間との仲を取り持つ役割を果たす」特殊技能を持つ人間の神格化であり、託宣を司る神であるとされつつも、国譲り神話においては、「託宣するものの姿は造形されていない」とされる(『日本書紀』の記述(後述)も同様とする)。それは、コトシロヌシノ神の発言が「事代主神自身の

考えをあくまでも大国主に対して述べ」たものであることから言え、ここでのコトシロヌシノ神は、「宮廷守護」という役割」を有する性格による造形であるという。岡氏の説は、国譲り神話におけるコトシロヌシノ神が託宣の神ではない可能性を示唆しており、首肯される。ただし宮廷を守護するコトシロヌシノ神が大国主神に対して答えた内容が「事代主自身の考え」と理解されるかどうかについては、『古事記』の文脈において見たとき、疑問が持たれる。コトシロヌシノ神は、あくまでも大国主神の「心」を答えていると解されるからである。

国譲り神話におけるコトシロヌシノ神の役割は、大国主神の「心」をそのものとしてコトシロヌシノ神が表明するという点、コトシロヌシノ神がそれを大国主神に対して語っているという点から、いわゆる託宣の在り方とは合致しないことが推測される。ただし、国譲り神話におけるコトシロヌシノ神が、「言」を以てその役割を果たしていることからすると、全く「事」「言」の要素を有していないとも考え難い。コトシロヌシノ神は、「事」「言」に関わる神としてどのような性質を有すると把握されているのか、そして、『古事記』国譲り神話ではその性質がどのようなものとして表わされているのか、検討したい。

### 三 コトシロヌシノ神の名義

コトシロヌシノ神は、『古事記』国譲り神話では「八重言代主神」「八重事代主神」、『日本書紀』では、「事代主神」とあるほか、「於天事代於虚事代玉籤入彦厳之事代神」（神功撰政前紀（仲哀九年）三月）とも表記される。また、記紀以外では、祈年祭祀詞に「辞代主」と

表記される。ここではまず、各文献に共通する「コトシロ」という名について見たい。

「コト」は、『日本国語大辞典 上代編』に「言と事とは、語源的に一つのものである。言に出して表現することによって、事柄の実現を信じた上代人の心理には、言は事としてとらえられていたと考えられるからである」とされる。「コト」は、事柄としての「事」とことばとしての「言」とに両義的であり、「言」は「事」を言い表わすという方法であろう。コトシロヌシノ神が「事」「言」「辞」と表記されるのは、この神が「言」は「事」であるという考え方に基づいて創出された神であることを考えさせる。

「シロ」の意味は、先に引用した、西宮説や新編全集の説のように、「本物に代つて、本物と同じはたらきをすること」と解するか、「知る」「領る」と解するかどちらかによる説が見られる。ただし、井手至氏が「言（＝事）を知（＝領）る神という名をもつ事代主神」とされ、また、萬葉歌に見られる「開木代」（二二八六）についての論の中で、「元来、『代』という語が、『領る』と関係のある語であったとされることを踏まえると、『コトシロ』とは、『コト』の『代』として、『コト』そのものとなるという中に、すべて『コト』を把握し、『言』にして表わすことを含む、『コト』を司る者の意であると考えられる。では、『コト』を司る神とは、どのような職掌であるのか。『コト』が「事」と「言」とに両義的であるのであれば、それは、「事」を把握し「言」にして言い表わす神であると言えるだろう。

「コトシロ」の神とは、未だ表明されずにある「事」を掌握し、現前させる、そうした役割を有する者であったと考えられる。そし

て、「事」<sup>コト</sup>を把握しそこに在らしめる方法は、「コトシロ」の神においては「言」<sup>コト</sup>でなくてはならなかったであろう。「事」<sup>コト</sup>と「言」<sup>コト</sup>との関係は、「コトシロ」の神の内部において確信的であることが期待されたはずである。さらに、そのように把握された「事」<sup>コト</sup>を、把握した「言」<sup>コト</sup>を介して外部に伝えることも、この神の役割の一つであると見られる。

コトシロヌシノ神と同じく「コト」を名に持つ神に一言主神がある。一言主神は、雄略天皇が葛城山で狩猟を行ったときに現れた神である。雄略天皇が名を問うたところ、「吾者、雖<sup>ヒト</sup>惡事<sup>コト</sup>而一言、雖<sup>ヒト</sup>善事<sup>コト</sup>而一言、々離之神、葛城之一言主之大神者也」(雄略記)と答えたという。一言主神は、惡しき事も善き事も、とにかく一言で言い放つ神である。「事」<sup>コト</sup>を「言」<sup>コト</sup>として表明することは、コトシロヌシノ神に重なるが、一言主神の場合、その力は、「一言」で発するということに宿る。一言主神は、「事」<sup>コト</sup>を言い表わす神である。一方、事(言)代主神は、むしろその「事」<sup>コト</sup>の把握を言うと考えられる。無限に存在する「事」<sup>コト</sup>を掌握し掬い取る神である。

「コトシロ」の神は、あるいは、託宣の場でことばを介する者の存在から発想された、その神話的な造形であったかもしれない。ただし、「コトシロ」という語の持つ意味は、神のことばを仲介する存在ということだけでなく、より広く、「事」<sup>コト</sup>に接しそれを掌握して「言」<sup>コト</sup>にして表明することをも表わすと考えられる。

また、『古事記』国譲り神話でコトシロヌシノ神は、「八重」を冠して表わされる。コトシロヌシノ神に「八重」が冠される例は、『延喜式』神名帳に「鴨都波八重事代主神社」(葛上郡)や『新撰姓氏錄』(出雲国神別)に長公を「八重事代主神」の裔とすることなどが

見えるが、記紀では、神代記のみに見られる。コトシロヌシノ神に「八重」が冠される意味を考えたい。

古代、一重二重と数えられる「もの」には、山・波・雲・時雨・雪・花・垣・薦・衣・帯などがあるが、萬葉歌に次のような例が見られる。

葦原の 水穂の国は 神ながら 事挙げせぬ国 然れども 辞  
挙げぞ吾がする 言幸く ま幸くませと 恙みなく 福く座さ  
ば 荒磯浪 有りても見むと 百重波千重波に敷き 言上げ

す吾は(言上げす吾は)

(13・三二五三、人麻呂歌集歌)

歌は、「言挙げ」によつて旅行く者の航海の無事を願う内容で、大宝元年の遣唐使派遣の際の饞宴歌ともされる。「言挙げ」は、本来、声を挙げたりことばに出して言い立てて人間の願望を実現させることとされる。小稿で問題とするのは、その「言挙げ」の行われることが、「波」が百重千重と繰り返し敷き重なることに譬えられていることである。この例から、「言」<sup>コト</sup>を述べ立てることが幾重と把握され得たと推測される。「言」<sup>コト</sup>が「八重」あるということであれば、八重事(言)代主神は、多くの「言」<sup>コト</sup>によつて「事」<sup>コト</sup>を現わす神と解される。ただし、コトシロヌシノ神が掌握する「コト」は、「言」<sup>コト</sup>ばかりに偏るのではない。「言」<sup>コト</sup>に表わされる「事」<sup>コト</sup>もまた、コトシロヌシノ神において幾重と表わされたのではないか。コトシロヌシノ神が把握する「事」<sup>コト</sup>は、繰り返し、立て続けに現われては重なり合う数多のものと捉えられたのであろう。コトシロヌシノ神の役割には「言」<sup>コト</sup>によつて言い表わすことが含まれるが、それすらも、幾重と在ることばの掌握を経ずに成し得ないはずである。

萬葉歌で幾重と数えられるものの一つに、「心」につくる思いが

ある。

三熊野の浦の濱木綿百重成す心は念へど直に相はぬかも

(4・四九六、人麻呂)

思いがつのことを浜木綿に譬えた歌である。浜木綿は、莖状の部分から延びる長い葉が下から上まで幾重にもなる植物である。そのため、一株がわざわざとした塊のように見える。重なり合つて見えるのは、葉だけではない。先端に十数個咲く白い花は、花ごとに木綿を細くちぎつたような花弁を六枚持ち、それが幾重にも見えるのである。花も葉も、数限りなく重なつて茂り、それが群生する。四九六歌の恋の思いは、思いが重なるものであるという把握に基づき、それが数えきれないほどに重なつてあることを、浜木綿に譬えて表わしていると考えられる。恋の思いを幾重と把握することは次のような歌にも見られる。

吾が恋は夜昼別かず百重成す情し念へば甚も便なし

(12・二九〇二)

心には千重に百重に思へれど人目を多み妹に相はぬかも

(12・二九一〇)

このように「心」につる恋の思いが百重千重と捉えられたことは、『古事記』の八重事(言)代主神を考える上で注意される。なぜなら八重事(言)代主神がその「言」に現わす「事」は、大国主神の「心」であるからである。大国主神の「心」に在るのは、言うまでもなく恋の思いではないが、その「心」の裏に未だ表わされずに在る「事」は、幾重と捉えられたと考えられる。

#### 四 コトシロヌシノ神の性質

コトシロヌシノ神の発言が、大国主神が国譲りを受諾する際に決定力を持つことは、その後、大国主神のもうひとりの子建御名方神が「不<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>我父大国主神之命<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>八重事代主神之言<sub>一</sub>」と言つて科野国に止まつたとされること、大国主神が再び「心」を問われて「僕子等二神随<sub>レ</sub>白」と受諾の返事をしてることから了解される。子の二神の申し上げたことに従う、という大国主神の返事は、先に建御名方神が八重事代主神に従うと述べていることからすれば、実質的にはコトシロヌシノ神の発言の内容に拠ると見られるからである。そして、大国主神が「僕子等百八十神者、即八重事代主神、為<sub>二</sub>神之御尾前<sub>一</sub>而仕奉者、違神者非也」と述べることは、コトシロヌシノ神が国つ神を率いる神であることが考えられる。では、コトシロヌシノ神が担つた、大国主神の「心」を答えるという行為は、どのような性質によるのだろうか。

未だ表明されずに在る神の「心」は、それがどのように在るのか、疑問を持たれる。たとえば須佐之男命が、父神の命令に従い根堅州国へ行くこと決め、それを告げるために高天原の天照大神のもとを訪れたとき、天照大神は、よからぬ「心」を持つていと疑う。邪心は無いと訴える弟神に、「然者、汝心之清明、何以知」(神代記)とその「心」の証明を求めるのである。それはウケヒによつて表明され、確信された。

神の「心」は、人の世においては、次のような形で表明された。

此(崇神)天皇之御世、役病多起、人民為<sub>レ</sub>尽。爾、天皇愁歎而坐<sub>二</sub>神牀<sub>一</sub>之夜、大物主神、顕<sub>二</sub>於御夢<sub>一</sub>曰、「是者、我之御心。

故、以<sup>レ</sup>意富多々泥古<sup>一</sup>而、令<sup>レ</sup>祭我前<sup>一</sup>者、神氣、不起、國、亦、安平<sup>一</sup>」

(崇神記)

崇神天皇の時代、國に疫病が流行し、多くの人びとが命を落とした。天皇が疫病流行の原因を夢占で問うたところ、大物主神が現れ、疫病の流行は「我が心」なのだと述べる。そして、自分の子孫である意富多々泥古を司祭として祭祀を行えば、祟りは止むと神が告げる。ここでは、疫病という事態が神の「心」の表明としてある。神のことは、そのことを託宣を受ける者に知らせる方法と見られる。託宣を受けた天皇は、託宣の内容を実行し、祟りは収まる。神のことは、祟りが神の「心」の表明であることを知らしめるが、その内容を信じるかどうかは、それを聞く者に委ねられるのである。

於是、大后婦神、言教覺「西方有<sup>レ</sup>國、金・銀為<sup>レ</sup>本、目之炎輝、種々珍宝、多在<sup>レ</sup>其國」。吾、今婦賜其國<sup>一</sup>。爾、天皇答曰、「登<sup>二</sup>高地<sup>一</sup>見<sup>二</sup>西方<sup>一</sup>者、不見<sup>二</sup>國土<sup>一</sup>、唯有<sup>二</sup>大海<sup>一</sup>、謂<sup>二</sup>為<sup>レ</sup>詐神<sup>一</sup>而、押<sup>二</sup>退御琴<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>控、默坐。」(仲哀記)

ここで神の「心」に当たるのは、西方の國を服属させる、という内容であろう。これは、後に神功皇后による新羅遠征の成功で表明される。託宣で述べられた神のことは信じなかった仲哀天皇の崩御詔者は、その請け負う損失の大きさを示している。

「言<sup>コト</sup>」を聞く者が、その内容を信じない可能性は、コトシロヌシノ神の「言<sup>コト</sup>」にも同様に認められるはずである。建御名方神と大國主神とが、コトシロヌシノ神に従うと決断する裏には、それを拒否する可能性も同等にあると言える<sup>17)</sup>。

コトシロヌシノ神は、「コト」を司る神として大國主神の「心」を把握する。神の「心」がどのようにあるかは、コトシロヌシノ神

の内部において確信的であることが期待される。そして、コトシロヌシノ神はその内容を「言<sup>コト</sup>」によって知らしめるのである。コトシロヌシノ神の「言<sup>コト</sup>」は、神の「心」そのものの表明であるだろう。しかし、神が「言<sup>コト</sup>」をもつて相手に「事<sup>コト</sup>」を伝えるという方法を取る限りに於いて、それは聞く者の判断に晒される。それ故に、「言<sup>コト</sup>」の内容は、その「心」を持つ主体であるはずの大國主神自身にすら拒否される可能性を生じさせている。ここにおいて、コトシロヌシノ神がその存在によって保証するのは、「言<sup>コト</sup>」に表わされる内容が、「事<sup>コト</sup>」として確かに在るという、そのことではない。大國主神自身がその「事<sup>コト</sup>」に従うかどうかは、この時点では確信されないものである。それは、「コト」を司るはずのコトシロヌシノ神が持つ葛藤と捉えられよう。

コトシロヌシノ神という存在に期待される性質と國譲り神話におけるこの神の「言<sup>コト</sup>」との間に、何故このような葛藤が生じたのか。それは、コトシロヌシノ神が大國主神の系譜に組み込まれ、國譲り神話で大國主神の「心」を表明して自らも隠れるという役割を担わされたためであると推測される。

西田氏や吉井氏の論じられたようにコトシロヌシノ神が天武朝に宮廷を守護する神として新しく位置づけられたのであるとすれば、その系譜や役割も、國譲り神話の展開に後次的に組み込まれたと考えられる。コトシロヌシノ神は、大國主神に対して「恐之。此國者、立<sup>二</sup>奉天神之御子<sup>一</sup>」と述べて船を傾けて隠れたとする。その展開から、コトシロヌシノ神の「言<sup>コト</sup>」の内容は、コトシロヌシノ神自身の行動にも及ぶものであったと解される。そして、この神がそうした役割を機能させるためには、「コト」の神として「言<sup>コト</sup>」に拠らな

ければならない。「言」は、発言されることによって他者の判断を受けるものとなる。葛藤は、そこに生じたであろう。

ただし『古事記』は、コトシロヌシノ神という存在に対して、この神の「事」を把握し、それを本来疑いのない「言」として表わし得る性質に自覚的であり、またそのことに基づく表現に方法的であると考えられる。それは、「八重」や「事代」「言代」という表記に見られよう。「事代」「言代」の表記は、「コト」が「言」と「事」とに両義的であることへの意識的な態度が読み取られる。そして「八重」が、幾重にも存在する「事」をすべて掌握する神であることを表わすのであれば、八重事（言）代主神は、この神が「コト」を司る存在であるという理解に基づく名であると言える。

さらに、そのことは『古事記』の文脈にも窺える。『古事記』は、「汝が心」を問われた大国主神が「僕者、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>白。我子八重言代主神、是可<sub>レ</sub>白」と答えたとし、コトシロヌシノ神の「言」が、「心」の表明であることを明確にしている。その「言」は、コトシロヌシノ神が御大の埼から伊耶佐の小汀に戻って大国主神に対して直接述べたとされている。「言」が大国主神の「心」の表明であるならば、それを大国主神に対して述べるのは、幾重もある「事」の一端であるその「心」を「言」によって大国主神に現前させる行為に他ならない。そこには、八重事（言）代主神の本来の性質に対する理解が前提にあると見られる。

『古事記』における八重事（言）代主神のこのような在り方は、国の譲渡という重要な決定を保証する発言を行うコトシロヌシノ神が、すべて「コト」を知る者でなければならなかったと意識されていたことを考えさせる。

では、『日本書紀』でコトシロヌシノ神の性質はどのように表わされているだろうか。『日本書紀』の国譲りの場面をあげる。

（武甕槌神と経津主神とは出雲国五十狹の小汀に降り、大己貴神と対面する。）而問<sub>二</sub>大己貴神<sub>一</sub>曰、「高皇產靈尊欲<sub>レ</sub>降<sub>二</sub>皇孫<sub>一</sub>、君<sub>中</sub>臨此地<sub>上</sub>。故先遣<sub>二</sub>我二神<sub>一</sub>、驅除平定。汝意何如。当<sub>二</sub>須避<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>。時大己貴神対曰、「当<sub>下</sub>問<sub>二</sub>我子<sub>一</sub>、然後將<sub>レ</sub>報」。〔子の事代主神は、三穗の碕に出かけていたため熊野諸手船（亦の名は天鵲船）に乗った稲背脛を使者として派遣した。使者は、高皇產靈の勅を伝達する。〕時事代主神、謂<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>曰、「今天神有<sub>二</sub>此借問之勅<sub>一</sub>。我父宜<sub>二</sub>当奉<sub>一</sub>避<sub>レ</sub>。吾亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違」。因於<sub>二</sub>海中<sub>一</sub>造<sub>二</sub>八重蒼柴籬<sub>一</sub>（柴、此云<sub>二</sub>府籬<sub>一</sub>、蹈<sub>二</sub>船柵<sub>一</sub>（船柵、此云<sub>二</sub>浮那能倍<sub>一</sub>）而避之。故大己貴神則以<sub>二</sub>其子之辞<sub>一</sub>、白<sub>二</sub>於二神<sub>一</sub>曰、「我怙之子、既避去矣。故吾亦当<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>」。〔大己貴神は平<sub>レ</sub>国時所<sub>レ</sub>杖之広矛を天つ神に授け、隠れる。〕（神代紀第九段正文）

天つ神は、大己貴神に対して「汝が意」を尋ねる。「退くかどうか」という問いが提示され、それに対して大己貴神は「我が子に尋ねて、その後返事をしよう」と答える。この展開は、『古事記』と変わりのないように見られるが、『古事記』が「汝が心は如何に」という問いに大国主神が「自分は申し上げることができない、子の八重事代主神が申し上げる」と答えることとは、若干の相違があるように思われる。『古事記』の文脈では、事代主神に求められるのは、大国主神の「心」であることが明らかである。一方、『日本書紀』の文脈では、「退くかどうか」という意志を子の事代主神にも尋ねてみよう、と読み得るからである。事代主神は「我父宜<sub>二</sub>当奉<sub>一</sub>避<sub>レ</sub>。吾亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違（父は避り申し上げるだろう、自分もそれと異なることはな



い」と答えて隠れ、それを使者から伝言された大己貴神は「我怙之子、既避去矣。故吾亦当レ避（頼りとした子が隠れた、自分もまた避ろう）」と言つて、国を譲渡する。事代主神の答えは、父神の「意」を述べたものであるが、「宜当」（すべし）とあることから、そこに事代主神自身の判断の介在が認められる。大己貴神と事代主神とは、結果として、互いの意志を窺いつつ、国を譲るに至つていゝと見られよう。

ここでコトシロヌシノ神の「言」は、「事」即ち大己貴神の「意」からは独立して、コトシロヌシノ神の意志を表わすことに、より傾いていゝと見られる。そして、コトシロヌシノ神の意志は、大己貴神のそれと同等に尊重されていゝと解される。このようなコトシロヌシノ神の在り方は、この神が、後に三代の天皇妃の祖とされ、歴代巻で託宣を下すことと無関係ではないだろう。天皇家の系譜に関わり、軍事的な側面での宮廷守護を担うコトシロヌシノ神の「言」は、コトシロヌシノ神自身の意志として価値をもつと考えられる。

『日本書紀』でコトシロヌシノ神の存在は、宮廷守護の神であることを前提とする。神功皇后摂政前紀（仲哀九年）三月の託宣に現れたコトシロヌシノ神の名「於天事代於虚事代玉籤入彦厳之事代神」も、皇軍を加護する存在としての名であらう。玉籤入彦は、その靈威が「籤」に入ることと解される。「籤」は、占いで験を得るための道具で、『説文解字』に「籤 験也、一曰鋭也、貫也、从竹鐵聲」と見えることから、鋭くものを貫く串の如きものが想定される。神聖な串に依り憑く神であることを表わしていゝよう。それはまた、コトシロヌシノ神が婚姻に通つた女性の名が三島溝織姫または玉櫛姫とされることを想起させる。名義は、天上や虚空に満ちる

「事」を把握する靈威をもち、神聖な籤（櫛）に依り憑いて「事」を表明する、勢いの盛んなコトシロの神である。ここにおいてコトシロヌシノ神が把握する「事」とは、宮廷守護に他ならず、コトシロヌシノ神の「言」は、そのように限定的な「事」の実現を促すものとしてあると考えられる。

国譲りに際してコトシロヌシノ神に答えを求める伝承は、神代紀第九段一書第一にも見られる。

時二神（武甕槌神と経津主神）、降出雲国、便問大己貴神曰、「汝将此国奉天神、耶以不」。対曰、「吾兒事代主射鳥邀遊、在三津之碕。今当問以報之。乃遣使人訪焉。対曰、「天神所求、何不奉敷」。故大己貴神以「其子之辞」報乎二神」。

（神代紀第九段一書第二）

天つ神が大己貴神に譲渡の諾否を問い、その答えを大己貴神が使者を通して事代主に問うてから、その「辞」に従つて国譲りを承諾する、という展開は「古事記」や神代紀正文と同様であるが、簡略であるために、大己貴神と事代主と事代主の「辞」との関係が明確ではない。しかしこの伝承は、却つて、「古事記」と神代紀正文とが、それぞれの意図によつてコトシロヌシノ神という存在を表わす方法を持つことを考えさせる。

記では大国主神・建御名方神、紀では大己貴神がその「言」の内容に従つて国譲りの意志を表明するのは、記紀の国譲り神話でコトシロヌシノ神の「言」の内容が重要視されているためであると考えられる。コトシロヌシノ神は、本来、「言」は「事」であるといゝ考え方を基盤に持ちつつ形成された神であり、この神の存在において、「コト」を「事」として確信的に掬い取る者といイえる。た

だし、国譲り神話では「言」がその内容を伝える方法であるために、「言」への判断は、聞く者に委ねられる。表現は、そこにコトシロヌシノ神を造形する可能性を持つと考えられる。

注(1) 以下、コトシロヌシノ神の名は片仮名で示し、表記が問題となる場合には漢字で示す。

- (2) 西田長男「記紀神話の成立と壬申の乱」『古代文学の周辺』第三章二節、桜楓社、昭和三十九年  
吉井巖「ヌシ」を名にもつ神々」『天皇の系譜と神話』一、塙書房、昭和四二年

- (3) 神野志隆光「ことむけ」『古事記の達成』9章、東京大学出版、昭和五八年

- (4) 引用部の漢字の旧字体は、新字体に改めた。

- (5) 『新潮日本古典集成 古事記』「神名の釈義」、新潮社、昭和五三年  
小学館、平成九年

- (7) 三谷栄一「事代主神の性格」『日本神話の基盤』第三章 塙書房 昭和四九（初出は昭和四六）、尾崎暢映「古事記全講」昭和四一、西郷信綱『古事記注釈』昭和五一、倉野憲司『古事記全註釈』昭和五二、日本古典文学大系『古事記』昭和三三、日本思想大系『古事記』昭和五七、益田勝実「魔王伝説―日本の権力の一源流―」『火山列島の思想』（初出は昭和四一）は、神言の代行者、神を祭る職能神とする。

- (8) 「事代主神の諸問題」『古事記の神々』上、古事記研究体系5―I、高  
科書店、平成十年

- (9) 三省堂、昭和四二年

- (10) 「コト」の意味の展開については、内田賢徳氏「萬葉の言」〔『萬葉』  
一一三、昭和六一年二月）を参照。

- (11) 「辞」は、『礼記』曲礼上の「曲礼曰、母レ不敬。儼若思、安シ定辞」の鄭玄注に「辞、言語也」と見えるように、ことばの意と解される。

- (12) 各説については、岡氏前掲論文注(8)、伊藤剣氏「神武紀の事代主神」〔『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五二―三、平成一九年〕に詳しい。  
(13) 「ことば」と名まえ「遊文録」説話民俗篇、第十章、和泉書院、平成一六年

- (14) 「開木代」『遊文録』国語史篇二、第五章、和泉書院、平成二一年

- (15) 日本古典文学全集『万葉集』（小学館、伊藤博『萬葉集釈注』

- (16) 太田善磨「言挙」考―文学史上の一問題として―『古代日本文学思潮論』IV、〔初出は『国語と国文学』三二―二二、昭和二九年二月〕

- (17) 内田氏前掲論文注(9)

- (18) 西田氏・吉井氏前掲注(2)

- (19) 「虚」は、「時有鳴鶴」、度「大虚」。(誉津別) 皇子仰観鶴曰：「(垂仁紀二十三年十月)とある「大虚」が地上から見渡すことのできる空を表わすように、虚空のことであると考えられる。